

穀物相場の動向について

雪印種苗(株) 飼料部飼料一課 丸田 卓也

写真はアメリカのトウモロコシ畑

はじめに

● 昨年は穀物市場にとって、まさに波乱の1年でした。昨春以来、1995/96年度米国産トウモロコシの需給事情が急激に悪化し、在庫水準が史上最低と危機的状況に陥り、一時は食糧危機説まで流れ、7月にはシカゴ定期では1ブッシェル(25.4012kg)当たり554-1/2セントという史上最高値を記録致しました。これらの出来事は、飼料穀物関係者ばかりではなく、社会の注目度を集め、様々なニュースで取り上げられたことは記憶に新しいところです。

さて、これらの状況を踏まえ、今年の世界の穀物市況はどのような見通しになるのか、飼料穀物の代表ともいえるトウモロコシを中心に述べさせていただきます。

1 穀物相場の変動要因

● 商品(穀物)先物市場で取引される商品の価格決定とその変動にはいくつもの要因があり、その時々的情勢・環境によって市場に与える影響の程度にも大小がありますが、最大かつ基本的なものは需給関係であります。

したがって、価格の変動は時として市場参加者の心理・行動によって思いがけない方向性が生じることがありますが、基本的には商品ごとの需給関係の変化によって連動するといっても差し支えないでしょう。

そこで、USDA(米国農務省)から米国や世界の穀物の需給統計が毎月発表されておりますので、その数字をもとに分析したいと思います。

2 米国産トウモロコシの需給動向

昨年12月12日にUSDAより発表された需給予測によると、96/97年度の米国産トウモロコシの作付け面積は新農業法の成立による減反廃止、作付け自由化等による作付け拡大が進んだことにより、79.6百万エーカーと前年度と比較して約12%増となりました。また、単収についても当初干ばつ(ラ・ニーニャ現象)懸念や病虫害懸念があり、市場をパニックに陥れんばかりの様相を呈していましたが、昨年夏場以降、天候が順調だったことを受け、126.5ブッシェル/エーカーと予想されております。したがって、生産量は92.7億ブッシェルと、減反・熱波等により生産量が減少した前年度と比較して、25.6%増と史上3番目の豊作となることが見込まれております。

一方、需要面では、輸出需要及び米国内需要がありますが、輸出需要では、まず1番のキーポイントとなるのが中国の動向であります。詳しくは後述しますが、昨年度は史上最高のトウモロコシ生産となる見通しであることから輸出再開の噂さえでていること、また、今年アルゼンチン、ブラジル等の南半球生産国での生産増が見込まれることや世界の小麦と粗粒穀物の需給も緩和傾向にあること等から、米国の輸出量は減少することが見込まれます。

米国内での需要は、まず飼料用途の需要が昨年のトウモロコシ価格高騰の影響により、レーショニング(家畜の飼養頭羽数を減らして、飼料需要を抑制すること)現象が起きていましたが、ここへきて、価格下落により急速に需要が拡大してきており、前年度比5.6%増が見込まれます。その

表1 米国産トウモロコシの需給推移

(年度：9-8月)

年 度		85/86	86/87	87/88	88/89	89/90	90/91	91/92	92/93	93/94	94/95	95/96	96/97
作付面積 (百万エーカー)		83.398	76.580	66.200	67.717	72.221	74.171	75.951	79.340	73.235	79.175	71.245	79.555
収穫面積 (百万エーカー)		75.209	68.907	59.505	58.250	64.703	66.952	68.847	72.162	62.900	72.887	64.995	73.269
平均単収 (ブッシェル/エーカー)		118.0	119.4	119.8	84.6	116.2	118.5	108.6	131.4	100.7	138.6	113.5	126.5
期初在庫 (百万ブッシェル)		1,648	4,040	4,882	4,259	1,930	1,344	1,521	1,100	2,113	850	1,558	426
生産 (百万ブッシェル)		8,875	8,226	7,131	4,929	7,525	7,934	7,475	9,482	6,336	10,103	7,374	9,265
輸入 (百万ブッシェル)		10	2	3	3	2	3	20	7	21	10	16	10
供給 計 (百万ブッシェル)		10,534	12,267	12,016	9,191	9,458	9,282	9,016	10,589	8,470	10,962	8,948	9,702
飼料用 (百万ブッシェル)		4,114	4,669	4,798	3,941	4,389	4,669	4,878	5,301	4,704	5,534	4,711	4,975
その他 (百万ブッシェル)		1,153	1,224	1,243	1,293	1,356	1,367	1,454	1,511	1,588	1,693	1,583	1,670
国内需要 計 (百万ブッシェル)		5,267	5,893	6,041	5,234	5,745	6,036	6,332	6,813	6,292	7,227	6,294	6,645
輸出 (百万ブッシェル)		1,227	1,492	1,716	2,026	2,368	1,725	1,584	1,663	1,328	2,177	2,228	1,900
需要 計 (百万ブッシェル)		6,494	7,385	7,757	7,260	8,113	7,761	7,916	8,476	7,620	9,405	8,522	8,545
期末在庫 (百万ブッシェル)		4,040	4,882	4,259	1,930	1,344	1,521	1,100	2,113	850	1,558	426	1,157
在庫率 (%)		62.2	66.1	54.9	26.6	16.6	19.6	13.9	24.9	11.2	16.6	5.0	13.5
農家平均価格 (ドル/ブッシェル)		2.23	1.50	1.94	2.54	2.36	2.28	2.37	2.07	2.50	2.26	3.24	2.50-2.80

注) 95/96、96/97年度は96年12月12日発表数字。

資料：USDA「SUPPLY AND DEMAND REPORT」

他、食品・工業用途の需要は94/95年度までは前年度を一度も下回ることなく毎年増大しておりましたが、95/96年度では価格高騰の影響により初めて前年度を下回りました。この用途での順調な伸びは食品（コーンスターチなど）ではなく、工業用が大きく寄与していました。1ブッシェルのトウモロコシから2.5ガロン（約10リットル）のエタノールが生産され、その用途は混合ガソリンとして自動車燃料に使用されています。エタノールは税制面で優遇措置を受けており、これが順調に需要が伸びている要因でありました。ところが、96年春ころからのトウモロコシの価格高騰により、エタノール業者の採算悪化から需要が落ち込んでおりましたが、ここへきて価格下落からまた需要が回復し、94/95年度に近い水準まで回復すると予想されます（表1参照）。

3 中国の動向

中国の経済は90年半ばより実質国内総生産が年率10%以上の成長を続けており、その結果、国民の実質所得が増加し、植物油や高品質米、さらには畜産物消費の増加に伴い、飼料穀物等の国内需

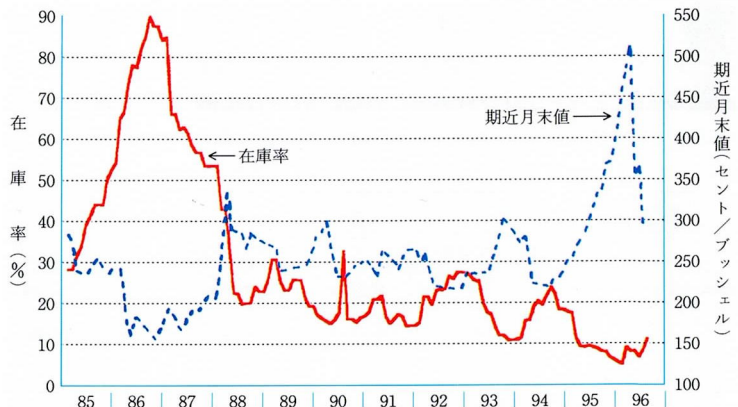


図1 米国トウモロコシ在庫率とシカゴトウモロコシ相場

要が急増しています。

95/96年度はトウモロコシが史上最高の豊作となるなど食糧全体でも史上最高の生産となったにもかかわらず、大豆油、米、トウモロコシ等は国内生産が需要の拡大に追いつかず、また、国内価格も高騰していることから、94年末以降、トウモロコシの輸出が停止され、米の輸出も厳しく規制されています（米、トウモロコシについては94/95年度から純輸入国に転じました）。

その結果、95年春からの世界穀物需給が逼迫化、在庫の払拭、ひいては穀物相場の急騰を招く要因の一つとなりました（図1参照）。

長期的な展望に立てば、引き続き経済成長により、中国や東アジア諸国の食文化が多様化し、さ

らに飼料穀物需要が増大し、穀物全般における高値誘導要因となる可能性があります。

しかし、農業保護政策の効果もありますが、多収穫品種の開発など技術革新により、生産量は向上し、自国の自給率が上がってきております。経済成長の伸びに農業生産がついていかないことがあっても、それは一時的なもので、長期的には国策もからめて自給率維持の方向へ進むものと思われま

す。現に96/97年度の中国のトウモロコシ生産高見通しは12月1日現在で117百万トン(前年112百万トン)とさらに史上最高の豊作となる見通しであり、ネットの輸出輸入量見通しはゼロと発表されております。また、最近では輸出再開の噂が絶えず、シカゴ定期低迷の一因となっているため、今後、深刻な穀物不足が生じ、穀物相場の価格水準が直ちに上昇していくという短絡的な結論には至らないと考えております。

4 南半球産地の生産高見通し

世界のトウモロコシの輸出量は米国が約7~8割を占めており、次いでアルゼンチン、南アフリカと南半球諸国が続く、この3か国で世界の輸出量の9割を超えます。

昨年度の穀物の高価格に刺激され、アルゼンチン等の南半球産地での作付け意欲は強く、また、96/97年度の生育状況も現状はおおむね良好となっております。生産高見通しは、ブラジル、アルゼンチン、南アフリカはそれぞれ、34百万トン(前年32.5百万トン)、13.5百万トン(同10.7百万トン)、9.5百万トン(同10.2百万トン)とブラジル、アルゼンチンは前年比で増加しています。それに伴い、輸出力も増大する見通しで、もし生育期にこれらの南半球産地で天候面で大きな問題がなければ、これらの国々の生産高も上方修正され、需給はさらに緩和することになると考えられます。

5 今後の相場見通し

以上のことから、トウモロコシの需給は緩和さ

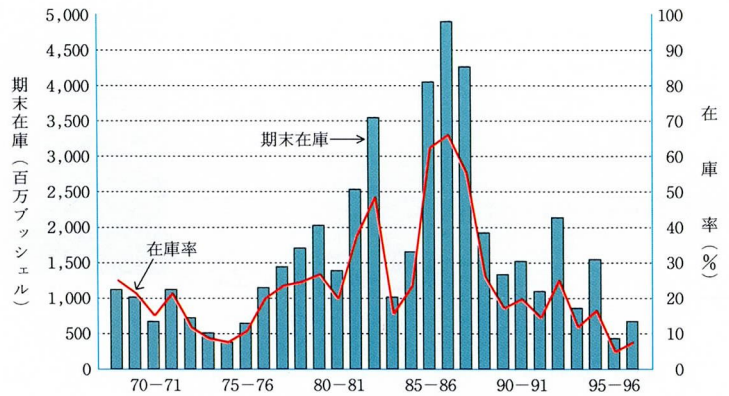


図2 米国トウモロコシ期末在庫と在庫率

れる見通しで、今後についても米国や南半球産地での生産高見通しがさらに上方修正される可能性があります。

また、需要面からも米国産トウモロコシに対する海外からの需要の低調も、シカゴ市場では弱材料視されてきており、前述のように世界的な豊作見通しから各輸入国としても先行きの相場下落を見越して、買手控えの姿勢を強めております。昨年12月12日発表の昨年度輸出成約高累計は23百万トンと前年同期(39百万トン)を大きく下回っています。

このように、トウモロコシ相場を取り巻く環境は全般に弱材料が目立ち、中期的には下落方向が続くと思われるものの、目先は米国農家の売り控えがあるため、しばらくは現在のレベルでのみ合いが続くと思われま

す。しかし、いくら今年の需給が緩和されたとしても、期末在庫率は13.5%と過去10年来でも3番目に低い水準にあるため、南半球産地での天候に問題が生じた場合や、トウモロコシ価格が下がることによって米国内での需要が更に増大する可能性があることから、まだまだ安心するには早く、今年1年も更なる注意が必要であると思われま

す(図2参照)。最後に、冒頭でも述べたとおり、相場商品は市場参加者の思惑で動くこともたびたびありますので、昨年の5ドル相場というものを経験した以上、今後も何かのきっかけによってはすぐに市況が今まで以上に乱高下する可能性が高くなったと言えるでしょう。